ベストクラス選定理由書

作成者：上山賢太郎・織田理子・勝谷こころ・川口真依・庭瀬敬右・森亮太・TONGTHINGO

科目名称　　教育方法論 （担当教員名：安藤福光）	
課　　程　：学部	開講時期　：　後期
授業形態　：講義	授業規模　：　８１人以上
インタビュー対象教員名　　安藤福光 （実施日時：令和 5 年 7 月 19 日（水）16:30～18:00　；　実施場所：言語棟 403 室）	
インタビュー対象受講者名　　上古代健太郎・小林佳和 （実施日時：令和 5 年 7 月 27 日（木）09：00～09:30　；　実施場所：言語棟 620 室）	

選定理由

本授業では「教育の方法」に関する力量を受講生が身につけることが目的とされている。そのため、教育方法学の理論とともに、具体的な技術についても学ぶことしているが、そのきっかけづくりとして、リフレクションペーパーの提出やそのコメントへのフィードバックがある。学生からは「多角的で面白い」や「主体的に参加できる授業だった」というコメントが挙がっており、教員と学生が相互にかかわりながら授業を作り上げている様子を伺うことができたため。

【担当教員へのインタビュー】

授業では、雑談を取り入れることで受講者が興味を持ちやすくなる授業構成している。200 人の受講生が集まる授業のため、Google フォームで出欠確認を兼ねた任意のコメントを募集することで、受講者からの参加を促すようにしている。Google フォームのコメントを見ると、うまく伝わっていなかったり、思いもしない伝わり方をしていたりするものもある。それらを次の授業の最初 30 分程度使ってコメント返しをすることで修正している。自分の用意した授業内容だけを淡々と話した場合は 30 分ほどの時間におさまるのだが、受講者からの質問や感想に丁寧に応えたり、受講者の反応を見ながら授業をすることで 90 分では足りない。（実際、このインタビューも 30 分程度を予定していたが雑談も合わせると 90 分以上の時間となっている）それだけ教員の伝えたい思いがあふれた授業であり、受講者もその思いに感化され熱い思いの感想や質問が寄せられていると考えられる。感想等は年度によって違うが、全体の３分の１程度返ってきており、書く人はものすごい量、内容、熱量で書いてくる。

また、理論と実践をつなげたいと思いや理論があっての実践であることを強調して伝えている。よく学校現場で見聞きした話を伝えている。「プロフェッショナル」や「女王の教室」などのビデオを見せて、教育方法について考えるきっかけづくりをしている。受講者からも「綺麗事だけではない授業」というようなコメントがあることからも、できるだけ現場の実情や受講者が教員になったときのことを想定された授業づくりをされていることが分かった。

【受講者へのインタビュー】

授業形式は講義形式なのだが、実際の学校現場のイメージが想像できるように現場の体験と結びつけながら話されていた。教員のやりがいや綺麗な面だけを見せて終わるのではなく、教員の難しさやもっと考えなければならない点など「綺麗事だけではない授業」であることが印象的だった。教員が意識的に中立的な立場をとることで、学生が陥りがちな「教育は絶対」のような意識を解いてくれた。難しいと感じる話も資料に丁寧にまとめてくださり、分かりやすく話してくださったので理解しやすかった。

出欠確認を兼ねたリフレクションペーパーを活用されていた。始めの 20－30 分で、生徒から寄せられたコメントに対して

フィードバックをするというものであるが、授業のことにかかわらず何でも相談できるラジオコーナーのようなもので、教員との距離が縮まり相互作用を取りやすくしてくださっていた。もちろん、雑談だけでなく、先週の内容を想起させながら、今週の授業に繋げられることで受講者のスムーズな授業参加を促してくれていた。

【総括】

安藤先生からは「教師にならない選択肢も提示している」と話されていた。中には教師になることを躊躇う学生もいることを理解した上で、教員のやりがいや美点だけではなく、実際の教育現場を通して、課題を伝えたり、また「女王の教室」などのビデオを見せることで学生が客観的、理論的に理解することができ、実践に繋げられるような授業作りをされていることが分かった。そのような安藤先生の授業に対して、学生のインタビューでは「多角的で面白い」というコメントがあった。２００人規模の授業に対して教員の授業への工夫と受講者の相互作用がなされたクラスだと考え、ベストクラスに推薦する。